

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.33

発行日 ● 平成29年(2017)3月15日

もくじ

ごあいさつ.....	1
小金井清明寮のこと.....	2~3
学習院大学史料館からのお知らせ.....	4



小金井清明寮玄関

ごあいさつ

弘化4年(1847)の京都御所東側における学問所の設置が学習院の一つの起源であり、ここから数えると今年で170年となります。また華族学校が神田錦町に開設された明治10年(1877)から数えると、140年となります。そのため今年の学習院の式典も活発化しますが、それに先んじて、大学史料館では世間にそれほど知られていない小金井清明寮について御紹介することに致しました。この寮は、年表が示すようにごく短い間の存在ですが、ここに書かれてありますように学習院の歴史においてその意義は深いと思います。御寄稿頂いた宮島清様にはこの場を借りて御礼申し上げます。皆様にはミュージアム・レターを通じて、我々史料館の活動を身近に感じて頂ければ幸いです。

(館長 上田隆穂)

小金井清明寮について

学習院は、明治10年(1877)、華族の子弟のための学校として創立された。同17年(1884)に宮内省所管の官立学校となってからは、戦後に私立学校となるまで、寄宿舎が設けられ、共同生活によって学生を教育することが重視されてきた。神田、虎の門、四谷とキャンパスを移し、明治41年(1908)、中・高等科が目白へ移転。以来、本館や正堂、教室棟、寄宿舎などを有する恵まれた環境であったが、昭和20年(1945)4月の空襲により、キャンパス内の木造建造物の大半が全焼した。

終戦となり翌年に授業が再開された際には、中等科3年生以上および高等科生は焼失を免れた西一号館で、中等科1・2年生は東京府北多摩郡小金井町(現・小金井市)の文部省の教学錬成所跡で受講することとなった。

小金井キャンパスは中央線武蔵小金井駅から徒歩30分ほどの立地。3万坪の敷地には、光華殿を中心に、本館、教員の学寮、屋内体育場など簡素な木造建築が配されていた。なお、皇太子明仁親王殿下の御仮寓所が、この地に葉山御用邸の具奉員宿泊所の建物を移築して設けられていた。

昭和21年(1946)9月、教学錬成所時代に教員の学寮であった建物を第17代院長・山梨勝之進が「光雲寮」と名付けて寄宿舎とし、遠距離通学者を中心に約20名が寮生となった。同寮は、昭和23年度(1948)末に中等科が新宿区戸山の女子部の一角の校舎に移転したため閉寮。翌年度には、「清明寮」と名称を変え高等科の寄宿舎として再び利用されることとなった。当時高等科学生だった皇太子明仁親王も他の寮生と生活を共にし、目白の高等科へ通学されていた。

食糧確保もままならない戦後の混乱と荒廃の中で誕生した小金井キャンパスや小金井清明寮の精神は、焦土から新たに歩み出した目白キャンパスおよび目白清明寮へと継承されることとなる。

本号では、小金井清明寮の寮生であった宮島清氏に御寄稿をお願いした。本紙が、終戦直後の学習院を語る上で重要な場所の一つである小金井キャンパス、そして小金井清明寮の歴史的意義を再検討することの一助となれば幸いです。

目白清明寮については、設計資料や元寮生の聞き書きを『学習院大学史料館紀要』22号「小特集 学習院の寄宿舎—目白清明寮—」(2016年)で紹介し、小金井清明寮についても野村雄三氏が説明されている。今後詳細については、“小金井清明寮”として戦後の学習院新制中等科及び新制高等科の去就と皇太子殿下ご教育との関係を辿ることも含め、紀要で小特集を編集することを計画している。

(学芸員 富田ゆり、丸山美季)



雪の日の光華殿

昨年、平成28年5月31日、天皇陛下は皇后陛下とご一緒に都立小金井公園の地へお久しぶりにお出ましになった。ここ小金井には戦後暫くの間、光華殿(紀元二千六百年記念式典会場)を中心として東宮仮寓所と学習院中等科の学舎があった。昭和21年4月中等科にご進学になった当時の東宮殿下はこの学舎でご修学になり、昭和24年高等科にご進学



清明寮南面窓から顔を出した寮生たち

になると小金井の仮寓所から目白にご通学なさることとなった(学習院中等科は高田馬場に移った)。その際に当時の東宮御教育参与小泉信三先生他ご関係者のご進言もあり、英国のパブリックスクールと日本の旧制高校の寮を模して高等科各学年の寮生計約20名から成る学生寮“清明寮”が設けられ、東宮殿下も一寮生としてご参加になり、休日を除く殆どをこの寮で質実剛健で規則正しい生活をお送りになった。この清明寮の建屋は敷地の東側、一番奥にあり、戦時中に文部省の教学練成所の寄宿舎として建てられた木造平屋の極めて質素なものであった。東宮殿下が高1、高2とこの地からご通学になっている間に目白に鉄筋コンクリート3階建ての新しい寮舎が出来て小金井の清明寮はその役目を終え、東宮殿下は高3と大学1年を目白の清明寮でご生活になった。天皇陛下が公務ご多忙の中、おかつろぎの場として小金井にお越しになり青少年時代を懐かしくご回想になったことは、同時期に小金井で生活を共にさせていただいた者として感無量である。

になると小金井の仮寓所から目白にご通学なさることとなった(学習院中等科は高田馬場に移った)。その際に当時の東宮御教育参与小泉信三先生他ご関係者のご進言もあり、英国のパブリックスクールと日本の旧制高校の寮を模して高等科各学年の寮生計約20名から成る学生寮“清明寮”が設けられ、東宮殿下も一寮生としてご参加になり、休日を除く殆どをこの寮で質実剛健で規則正しい生活をお送りになった。この清明寮の建屋は敷地の東側、一番奥にあり、戦時中に文部省の教学練成所の寄宿舎として建てられた木造平屋の極めて質素なものであった。東宮殿下が高1、高2とこの地からご通学になっている間に目白に鉄筋コンクリート3階建ての新しい寮舎が出来て小金井の清明寮はその役目を終え、東宮殿下は高3と大学1年を目白の清明寮でご生活になった。天皇陛下が公務ご多忙の中、おかつろぎの場として小金井にお越しになり青少年時代を懐かしくご回想になったことは、同時期に小金井で生活を共にさせていただいた者として感無量である。



雪の日の清明寮 渡り廊下



「渡辺先生結婚式」 雪人形作りの戯れ

実はこれを遡る平成27年10月2日、天皇陛下が高1から大学1年までの4年間、清明寮で寮生であった者達(陛下を含め35名)が久しぶりに親睦会を催した。会場は発起人であり、且清明寮の初代委員長であった松本 洋氏のご好意により麻布の国際文化会館で行った。当日常陸宮殿下のご出席は叶わなかったが、陛下は大変おかつろぎになりお喜びであった。皆々久しぶりにご歓談頂く機会を得て大満足、幹事を務めた者として恐悦至極であった。

当日展示するために清明寮に関する資料を収集したので、それらを学習院大学史料館に保管願うこととした。

両陛下の小金井へのお出ましの後、暫くして「陛下の生前退位」に関するNHKのスクープである。そして8月8日には「陛下のお気持ち」表明のテレビ放映があった。この機会に陛下が皇太子殿下として終戦を迎えられ戦後を乗り越えてこられた歴史の一端として、小金井中等科と小金井清明寮を史実として考究することは大いに意義あることと思う。

折しも平成28年10月、清水明雄著「清水文雄「戦中日記—文学・教育・時局—」という本が笠間書院から出版された。清水文雄先生は戦中戦後学習院教授として主に中等科で国文学を教えられた方で明雄氏は先生の御子息である。清水文雄先生は三島由紀夫の才能を見出し、三島由紀夫という文筆名の名付け親として高名な方であるが、学習院教授として当時の逼迫した

戦況と戦後の荒廃した状況の中であって、学習院中等科を、特に近々皇太子殿下がご進学になることを考慮していかなる体制にするかという難問題についていかに検討され実行されていったかが生々しく克明に記述されている。先生は我々のクラスの主管でもあった。東宮殿下の一学年上のクラスとして中等科1年は目白でなく日光の金谷ホテルの二荒山塾で勉強、終戦後は沼津の遊泳場(ガラス戸なしで冬を越した)での集団生活、2年になっても目白でなく小金井へ通学しなければならなかったがその理由を今更ながら知ることが出来た。我々には「混沌とした社会を離れて清く正しい生活をしながら勉強するため」との説明だったが、山梨院長先生はじめ諸先生方のご苦勞下さったことに頭の下がる思いである。また、この先生の日記によって、清水文雄先生が広島大学へ移られるまでの間、小金井初期の学寮・光雲寮の舎監を務められたことを知った。

今年の冬は久しぶりに寒さが厳しい。小金井清明寮が暮を閉じた昭和26年の冬も寒さ厳しく3月には大雪が降り、光華殿や清明寮を始め小金井一帯は真っ白に雪に埋もれた。冬休み中の寮生は若さに任せて雪に戯れた。そうした中、関係された先生方寮生の先輩をお招きして閉寮の催しを行い、全員で“蛍の光(Auld lang syne)”を斉唱したことを懐かしく思い出す。



小金井清明寮最後の日 蛍の光合唱風景
♪Should auld acquaintance be forgot, And never brought to mind?...♪
懐かしく思い出す

清明寮の会の歴史

昭20/8 ← GHQ監督下 → 昭27/4

昭22/3
私立学校となる

昭24/4
新制大学を開設

昭26/4
目白清明寮完成

昭31
学習院が所有権買取

年 度	昭21	昭22	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28	昭29	昭30	昭31	昭32
寮の名称	光雲寮			清明寮								
場 所	小金井					目白						

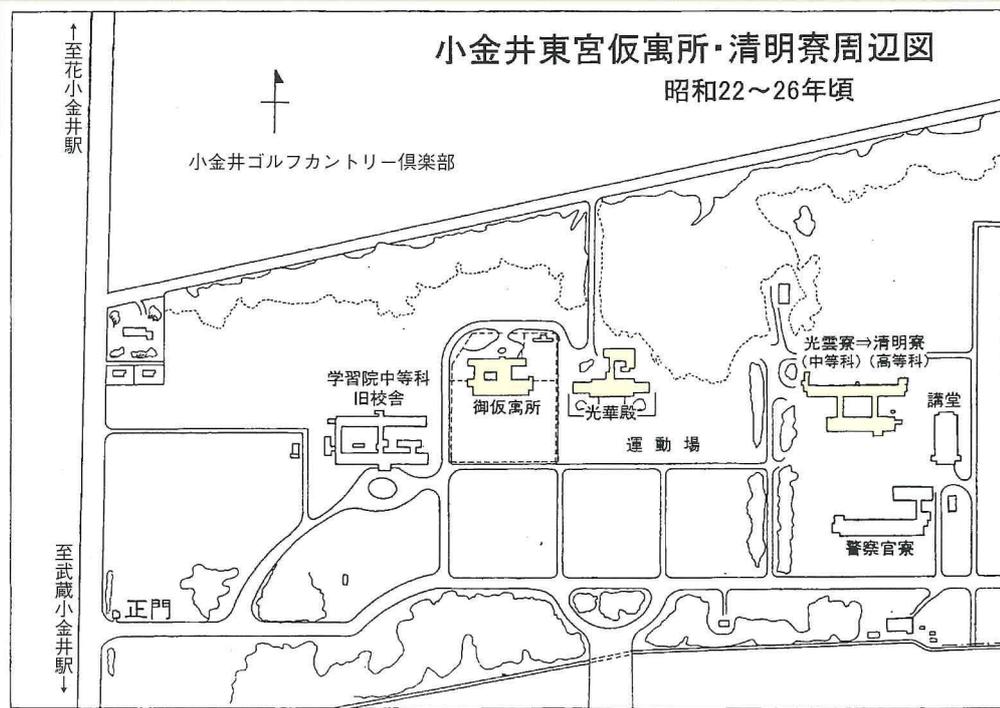
御在寮期間	※			皇太子明仁親王殿下			※			義宮正仁親王殿下		
学習院担当	中等科			高等科			大学			大学		
寮生数 (平成27年時点生存者)				39名			30名			20名		
寮生であった者の 会の名称				清明会			サモア会			清星会		

※両殿下とも光雲寮で余暇を過ごされ、また行楽行事に参加された

開寮に尽力下さった方(敬称略): 安倍能成、小泉信三、野村行一
お世話になった舎監の先生方(敬称略): 高等科: 渡辺末吾、高橋亮三、田中政次、大学: 石上太郎、磯部忠正、鈴木正三

恐れ入りますが、画像の閲覧をご希望の方は
ミュージアムレター本紙をご覧ください

宮島清氏
プロフィール
昭和7年(1932)8月生れ。学習院初等科～高等科を経て昭和30年(1955年)3月東京大学工学部を卒業して三菱重工(株)に入社、平成3年(1991)6月三菱重工(株)取締役開発本部長となる。この間、ディーゼルエンジンを主体にトラック・バスの開発業務に従事したが、後半、特に自動車工業会の公害対策部会で騒音と排気ガス対策に注力した。学習院では皇太子殿下の1年年長のクラスで、戦中、沼津・修善寺・日光へ疎開、戦後は小金井の中等科に通学。高2～高3の2年間、小金井の清明寮で寮生活をした。



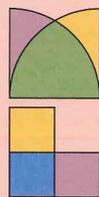
このミュージアム・レターをご覧になった先輩方、或いはその関係者の中に小金井清明寮に関する資料(写真等)をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ご提供下さいますようお願い申し上げます。

**学習院大学史料館平成29年度春季特別展
「宮廷装束の世界」**

- 【主催】** 学習院大学史料館
- 【共催】** 一般社団法人霞会館
- 【協力】** 一般社団法人霞会館・衣紋道研究会
- 【会期】** 平成29年4月1日(土)～5月27日(土)
開室：月～土曜日 10:00～17:00 閉室：日曜日・祝日
*4月16日「オール学習院の集いの日」は特別開室
- 【会場】** 北2号館1階 学習院大学史料館展示室
*入場無料
- 【ギャラリートーク】** 4/16(日)、5/20(土)
*いずれも14:00から30分程度、展示室にて、申込不要

ミュージアム・レター第33号

2017年3月15日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

●ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>